

やんばる国立公園へようこそ

やんばる国立公園は、広さこそ日本の国土面積のわずか 0.1%ですが、生物多様性においては国全体の中で小さな面積に不釣り合いなほどの大きな割合を占めています。本土からの長期の隔絶と沖縄南部からのアクセスの難しさにより、森は固有種の在来生物の楽園となりました。しかし、やんばるの森は手つかずでも原生でもありません。それどころか、この森は何百年にもわたる人間の活動によって形作られてきました。

前近代から戦後初期まで、森は島全体に木材と木炭を供給しました。国頭半島沿岸に点在していた小さな村々の住民は、山に入って協力して木を切り、それを南からやってくる「やんばる船」に売っていました。この仕組みは、最終的には洗練された村の協同組合のネットワークに発展しました。この仕組みを日本各地の類似の地域経済がモデルとし、多くの地域から代表が見学に訪れました。

村の人たちは森を丁寧に手入れし、常に切った分を補うのに十分な木を植え足しました。この方法は、18 世紀に蔡温という琉球王国の高名な官僚によって杣山（そまやま）方式として正式化されました。蔡温の知見は、第二次世界大戦後に米国の占領者までが学ぶほどでした。

戦後の復興が終わり、主なエネルギー源が木炭からガスと電気に代わると、森林の資源に対する需要は減少しました。多くの村は林業の代わりに農業を営むようになりましたが、森を大切にする伝統は残っています。

古代の楽園

国頭半島の大部分は 7 千～9 千万年前に形成されましたが、北端の辺戸岬は少なくとも 2 億 5 千万年にできたと考えられています。侵食を受けた石灰岩によるカルスト地形は、海岸の美しさを際立たせます。かつては水平だったけれど今では地表に露出し、ほぼ垂直に上方に突き出している岩層を持つ辺戸岳（安須森御嶽）のような印象的な地形は、古代の地殻変動の証を示しています。

やんばる国立公園は非常に多様な動物相を有しています。大型哺乳類の捕食者がいない中で、ヤンバルテナゴコガネやリュウキュウハグロトンボなどの昆虫から、イシカワガエル、シリケンイモリ、ハブなどの爬虫類・両生類に至るまで、無数の小さな生物種が繁栄しました。やんばるには、飛べない鳥ヤンバルクイナ（Okinawa rail）、働き者のノグチゲラ、印象的な姿のアカショウビン、そして人懐っこいアカヒゲを含む魅力的な空飛ぶ仲間もたくさんいます。アカヒゲは、陽気な赤毛の少年の姿をした「ブナガヤ」という森の精霊にまつわる伝承のモデルとされています。

森の植物相の中心は、やんばるの林業を支えてきたブナの仲間である常緑樹、イタジイです。イタジイを遠くから見ると森に羽毛が生えているように見えます。イタジイと並んで、頑丈なカシ、古生代から存在するヒカゲヘゴ、花を咲かせるガジュなど多種の樹木が生育しています。西表島のような鮮やかな熱帯気候の島々に対し、やんばるの柔らかい色合いは、水彩画に例えられてきました。森の繊細な美しさや、恥ずかしがり屋で小柄な生き物たちを見逃さないために、ぜひ現地ガイドに案内してもらいましょう。

お願い：動物の交通事故（ロードキル）防止にご協力ください

ヤンバルクイナをはじめとする希少な生物種は、特に繁殖期になると交通事故にあいやすくなります。運転する際は、国頭の「ストップ！ロードキル」運動にご協力いただき、森を通る道路では充分ご注意くださいようお願いいたします。